



国際ロータリー第2800地区 1959年6月9日創立

# 鶴岡ロータリークラブ

例会場 東京第一ホテル鶴岡 (鶴岡市錦町2-10) 例会日 毎週火曜日 (12:30~13:30)

平成27年11月24日(火) 第2738回 例会 (本年度第17回)

|           |                                  |
|-----------|----------------------------------|
| 12月 5日(土) | 第2ブロックIM・第2ブロック6RC合同例会           |
| 12月 8日(火) | 第2ブロックIMの振替休会                    |
| 12月15日(火) | ゲストスピーチ 出羽庄内国際村勤務・元米山奨学生 楊(ヤン)さん |
| 12月22日(火) | クリスマス家族例会                        |



Eメール◎tsuruoka08@rid2800.jp ホームページ◎http://www.tsuruokarc.org/

## 会長報告

会長/越智茂昭

### 1 年次総会について

来週12月1日(火)は例会終了後、年次総会がおこなわれます。

今日の新聞に「ご苦労様です」と言った人を殴ったということで逮捕されたという記事がありました。数か月前にタレントのタモリさんがAKBの若い子たちがタモリさんに「お疲れ様でした」と言ったら怒っているとネット上をにぎわせていました。言葉は時代とともに変化しますので難しいものです。

## 幹事報告

幹事/武田啓之

### ○ガバナー事務所

地区ローターアクト第2回会長幹事会のご案内

日時：11月29日(日)

登録開始：9時30分～ 会議：10時～12時

開催場所：山形県青年の家 締切11/22

### ○ガバナーエレクト事務所

次年度地区役員推薦のお願い

同意書等締切：12/16

## 全国藩校サミットについて (第二回)

羽前編練(株)監査役 遠藤 敏雄氏



前回(9月29日)は全国藩校サミットの目的、内容について申し上げましたが、今回は藩校(致道館)、藩学祖徠学、孔子、論語について、そして最後に庄内藩に関係の深かった長岡藩、肥後藩(熊本、加藤家)について時間の許す限り要約して申し上げます。

### ☆致道館について

庄内藩校、致道館についてはお手元のパンフレットをご参照願います。藩校は文化12年(1805年)創設され(山王神社の北側)当時は郊外であったと思われま。文化13年(1816年)に現在地へ移されています。

致道館の建物は岡山藩の藩校(閑谷学校)をモデルにしてその図面を借り受け、それを参考にして聖廟、講堂、書庫、詰所、御入間、各御門、武術場などを建設しました。現在の建物は聖廟、講堂、書庫、御入間が残されている。講堂の正面にある「致道館」という扁額は庄内の代表的な書家、重田道樹が揮毫したものです。(重田家は藩医の出身で先祖は今川家にさかのぼる名家である)この揮毫する時、下書きが長持ちいっぱいになったという逸話が残っている。「致道館」の名前はパンフレットの表紙にもあるとおり「君子学んで以て其の道を致す」という論語の一節からとった名称であります。

現在の建物は東北地方で唯一、当時の建物の一部が残されているのが鶴岡のみで非常に貴重な存在である。なぜ東北で鶴岡だけが残ったのか、これは戊辰戦争で各藩はほとんど火の海となったが、庄内藩は領内に官軍を入れず(新潟寄りの関川だけに一部入った)領外で戦った為、戦火をまぬがれ、又第二次世界大戦でも戦火をまぬがれた非常に稀な都市である。「建物の特徴」御入の間の廟下はウグイス張りの廟下や、床下、天井など敵が侵入しにくい設計になっている。御入の間は戊辰戦争終結後の城開け渡しの時、官軍の参謀黒田清隆と酒井家15代藩主忠篤公と会談した場所である。

### ☆荻生徠学について

庄内藩の学問は幕府が全国に命令した朱子学では

## 出席報告

|          |        |
|----------|--------|
| 会員数      | 35名    |
| 出席       | 20名    |
| 出席率      | 60.61% |
| 前々回確定出席率 | 69.70% |

RI会長 K.R."ラビ"ラビンドラン ■地区ガバナー 酒井 彰

■会長/越智茂昭 ■副会長/木村 節 ■幹事/武田啓之 ■会長エレクト/加藤 亨  
■会報委員会/佐藤詩郎・阿部純次・菅原成規

事務局：山形県鶴岡市錦町2-68 鶴岡SSビル1F TEL (0235) 28-3375 FAX (0235) 28-3376

なく、徂徠学を採用した。その理由は水野元朗家老をはじめ徂徠学を学んでいた人材が庄内藩には多く居た事で採用されたものと思われる。(彦根の井伊家も庄内と同じく採用していた) 徂徠学の学問スタイルは一般的な講義形式(朱子学)ではなく各人の個性を認め、自分で考えて学習する形をとり、長所を伸ばすことで短所は消え去るということで、「自学自習」に重点をおいた教育であった。又、会業といって今のゼミナールといったもので各人のコミュニケーションをはかって理解を深めていく教育であった。この教育で庄内から幾多の人材が育てられたのである。又、武術のレベルも非常に高かったと思われる。(戊辰の戦いで庄内藩の強さは官軍をはじめ、他藩にもその強力な戦力を認めさせた戦い振りだった)

### ☆孔子、論語について

まず孔子という人物はどんな人物であったのか、どこで生まれ、どんな人生を送ったのか。その人物像について概略を申し上げますと、孔子の故郷「曲阜」という所で誕生した。曲阜は現在の山東省南部。昔、孔子が生まれた頃の魯の国は勢いが無くなってきた頃であった。齊、晋、楚など大国に比べ小国になっていた。時期としては日本の縄文時代から弥生時代への移行期あたりと思われる。この時期の周王朝は弱体化して小国家がそれぞれの主導権争いを繰り広げていた。齊、晋、楚、呉、越、秦、宗といった国々

が368年間にじつに493回の戦争が常態化していた頃である。

このような戦国の世にあって古く周で生まれた「徳治」を理想とする思想は魯へ受け継がれ孔子によって育まれたのである。孔子は「論語」の中でこう述べている。「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」この意味は、朝そういう理想的な社会が実現したと聞いたら自分はもうその晩に死んでもかまわないとっている。この様な果てなく続く戦乱の世は徳治政治をめざす孔子の目には絶望的な現実映ったに違いなかったのでしょう。このような時代背景を過ぎて来た孔子は私生児だった。通常の結婚ではなかった。父親は67才、母親は15才だったという。父親は孔子が3才の時、又母親も17才の時、亡くすなど家庭運には恵まれなかった。だが母親は「顔徴在」といった名の巫女(ふじよ)いわゆる「みこ」であった。祈祷や儀式にかかわる女性だったので、孔子の幼少期から礼と学問の人、孔子の原点になったという見方もある。したがって恵まれた幼少期を送っていませんでしたのでさまざまな仕事をしながら魯国の片隅でくすぶっていたのでしょう。

私生活では19才頃一度結婚し子供ももうけたが、離婚してその後は妻帯していない。(女性はどうかや懲りていたふしがあるようである)孔子の容姿は身長が9尺6寸で2m16cmの巨人であった。人はみな「長人」と呼んで珍しがったと「史記」は伝え



(国指定史跡 庄内藩校 致道館)



ている。顔も鬼の面のような顔で白哲（皮膚の白い学者肌のインテリタイプ）ではなかった。孔子は「道に志し、徳に依り、仕に依り、芸に学ぶ」（立派な志を持ち徳と思いやりの心を大切に、六芸を楽しみなさい）といっている。六芸とは「礼、楽（音楽）、射（弓術）、御（馬車を操る技術）、書、数（算術）」（机の上の学問は書だけで礼学と心身の学問である）孔子は自身の人生の歩みをこの有名な言葉に残している。

- ・ 吾十有五にして学を志す
- ・ 30にして立つ（独立する、弟子を持つ）
- ・ 40にして惑わず
- ・ 50にして天命を知る
- ・ 60にして耳順う（他人の意見に耳をかたむける）
- ・ 70にして心の欲する所に順えども矩を喩えず（間違っただけをしない正真に生きること）

孔子には3,000人の弟子がいたといわれているが、その中で特にすぐれた弟子が孔子の十哲といわれている。こうした数々の弟子達との間に有益な言葉を残している。

故郷の魯を離れた孔子の旅は14年間に及んだ。

魯に戻った孔子はもう政治の表舞台に立つ事はなく、もっぱら弟子の教育に余生を注いでいる。

孔子の教えは「文（読書）」「行（実践）」「忠（誠実）」「信（信義）」の四つを基本とした。晩年の孔子にとって不幸だったのは一人息子の鯉（り）と最愛の弟子の顔回（がんかい）に先立たれた事だった。（顔回は清貧かつ徳行の人で孔子の最も信頼が厚く筆頭後継者と見られていた人物、40才で早世した）

孔子は「天我を滅ぼせり」と嘆き、声を上げて泣いたという。その後、子路も戦死、その翌年孔子は73才の生涯を閉じるのですが孔子は亡くなる前日まで書を読んでいたといわれている。

「論語」は孔子が亡くなってから100年後に弟子達によって孔子から学んだ内容をまとめたものを論語という言葉にしたものである。論語は聖書と並んで世界最大のベストセラーといわれ広く現在も読まれている。日本人の道徳観の礎を作ったともいわれていますが、それだけではなく時代や社会、政治体制、イデオロギーなど世相と変化していく中で揺るぎな

き不変のものとしての人生の真理、こういったものが日本人の心をとらえたものが論語であるといえるのかも知れません。論語は日本で戦国時代から江戸時代も読まれていた。主な武将では織田信長、武田信玄、豊臣秀吉、徳川家康なども読んでおり加藤清正などは武闘派と見られがちですが猛勉強して論語からリーダーとしての考え方、自分の生き方、行動を学んだといわれている。特に織田信長が一族を平定し岐阜城を築城した時、岐阜の阜は孔子の生まれ故郷の曲阜の阜をとって自分の城の名前にしたともいわれている。それが今の岐阜県の県名になっている。このように歴史上の有名なリーダーに論語は読まれていたのであります。

次に庄内藩に関係の深かった二つの藩について概略を申し上げます。

### ☆長岡藩と庄内藩との関係

庄内藩と長岡藩の縁は400年以上遡る。酒井家初代忠次の娘虎姫が嫁いだ先は牧野康成（7万4千石）、その康成の子、忠成が初代長岡藩主（駿河守忠成）だから忠次の外孫にあたる。その後、特に庄内藩と関係が深まったのは戊辰戦争であった。北越戦争で兵力に劣る長岡軍がひとときわ光彩を放ったのは、一度官軍の手に落ちた長岡城の奪還だが、その背景には長岡軍を支援する東軍の戦線建直しがあり、さらにその戦線建直しの要因をさぐるとそこに庄内軍の活躍が浮びあがってくる。長岡軍危うしの報に接し、庄内は石原多門に千余の兵を差し向け出陣した。さらに中村士郎右衛門が銃兵四小隊200名を率いて長岡支援に向かった。ヒトのいやがる浜手（海岸線、距離が長い）をあえて担当し、敵兵力をこの方面に引きつけて官軍の行動を牽制した諸隊（その主力は庄内軍）の命をかけた縁の下の力持ち的動きがあった。広く長い海岸線に官軍戦力を引きつけて戦力の分散に大きく貢献したことが長岡軍の再度の城奪還に成功した。庄内軍は戦線を内陸地方や秋田方面に進出していた中で、北越にも応援に出かけ、一番困難な場所を受け持った。庄内武士の根性と辛抱強い気力、体力があったからといえる。これも日常の訓練と藩校精神の表れといえるでしょう。この戦いの中で再度奪還した城を官軍の大軍の兵力により奪い返された長岡軍は城外へ脱出し会津へ逃げのびるのである。この戦いで家老の河井継之助（長岡藩の中心人物）が鉄砲の玉が太ももに当り重傷を負っていたが、部下の士気にかかわると思って無理をして行動したが途中山越えにさしかかる時、戸板に寄せられた継之助は自分の命が尽きるのを悟り側近にこういった。自分は会津までは無理だろう、これからは庄内藩を頼って生き延びよと亡くなった。戦いが終わってしばらくして長岡藩から選ばれた数名の藩士が致道館を訪れた。庄内藩は暖かく迎え、藩校で教育を行った。その際、庄内藩士は宿泊、食事、すべての経費を自藩で負担し一切長岡

藩に負担をかけなかった。河井継之助は長岡で庄内藩の戦いぶりや行動をみて庄内藩の武士道に感ずるところがあったのだろう。現在も藩校サミット会場では長岡藩の人たちとは親しく交流をはかっている。

#### ☆庄内藩と肥後、熊本藩との関係について

第7回（平成22年）サミットが行われた肥後熊本藩、加藤清正公52万石、その長男忠広公（二代将軍秀忠の一字をもらっている）当時は清正の実力を高く評価し又、強敵と見ていたこともあり、徳川家としては清正が健在の頃は大事に扱っていたものと思われる。清正は大阪城で秀吉の子秀頼の付き添いで徳川家康と会談後、九州に帰る途中（船中）、体調を悪くして熊本城に帰って何日ももたずに亡くなった。死亡原因不明、毒殺との説もあるがよくわからなかった。忠広30才になった頃に突然、加藤家が改易となり、庄内に配流が決まり（寛永9年、1632年）庄内藩預かりの身となったのであります。奥方とは別々にされ（子孫を残さないため）、母親（正応院）とわずかの家臣（500石～1000石くらい）数名と従者、召使いの者一行100名程度が一ヶ月もたたずに待機させられていた江戸、池上本門寺（日蓮宗総本山）、今の池上線（五反田～蒲田の間）（清正は熱心な日蓮宗の信者だったので有名）から庄内に出立させられたのであります。庄内の丸岡村で落ち着く予定でしたが早すぎたので準備が間に合わず、一時常念寺に入り（当時の常念寺は今の倍くらいあった）待機、二ヶ月ぐらいで丸岡の新築の屋敷（館）に入った。庭から南へ見える金峯山（熊本にも同じ字の金峯山がある）の借景のある庭園、大手門、堀なども整備していった。

この間21年承応2年1653年、庄内の地で一生を終るのであります。母、正応院は前年に亡くなっている。

庄内藩の加藤家に対する扱いは配流された身分に対して過分の待遇をし、武士としての体面を保つ様取り計らっていたのであります。このあたりにも庄内藩の武士道の精神が現れているように思えます。この間、内密に1～2名女性を選んで忠広公の世話役（実際は側室のようなものとして付人）にしている。その子孫が女性の系統と男性の系統が現代まで400年近く続いているのもよく現代まで無事に過ごされてきたものと感銘を受けるものである。庄内藩では他にも2名の大名を預かっているが途中で他藩に移されている。この加藤家に対する対応が、後に西郷隆盛が武人としての加藤清正を大変尊敬していたので庄内藩の武士道としてあまりにも立派な行動を高く評価し、戊辰戦争後の庄内に対する戦後処理に大きく係わったのではないかと考えられます。現在、丸岡では毎年7月に清正公祭を行い、熊本との交流も80年ぐらいつづけている。昨年、加藤神社（熊本城二の丸内）の宮司が来鶴され講演しています。又各地に加藤神社があり、鶴岡（三川）に

も加藤神社がございます。

以上をもちまして2回にわたり講演の機会を与えていただき心からお礼を申し上げます。

今後の鶴岡ロータリークラブの益々のご発展を祈念いたしまして私の講演を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

#### 遠藤 敏雄氏経歴

昭和11年 鶴岡市生まれ  
昭和29年 鶴岡南高等学校卒業  
昭和33年 日本大学理工学部工業経営学科卒業  
同 第一工業製薬株式会社入社（京都市本社）  
在京中に近畿荘内会幹事長 及び  
日本大学京都校友会幹事長を8年間務める。  
昭和55年 帰郷後、羽前絹練株式会社総務部長・取締役  
その後、監査役（現職）を務める。  
平成20年 大和交通株式会社取締役就任。（現職）

## 委員会報告

### 出席委員会

#### ◆ゲスト

羽前絹練株式会社 監査役 遠藤 敏雄氏

#### ◆メイクされた方

藤川享胤君・丸山隆志君・佐藤久樹君

## スマイル

阿蘇司朗君 遠藤さん卓話ありがとうございました。鶴岡人として知られざることを学ばせていただきました。学生時代の事も思い出させていただきました。

真島吉也君 遠藤さんありがとうございました。

### RI ニュースから☆

## 国際機関の活動をサポート

国際ロータリー（RI）は過去30年にわたり、国連や国連機関、その他の国際機関（アラブ諸国連合や欧州連合など）にRI代表を派遣してきました。世界各地では、そうした代表者が橋渡し役となっており、大きなプロジェクトが実施されています。例えば、南米のエクアドルでは、ロータリーと米州機構（OAS）の協力によって、学校に通う子どもたちの読書力が高まり、教師には専門研修が提供されています。

このように、ロータリーと国際機関との活動をサポートするRI代表は、ホワイトハウス、国連、コモンウェルス、欧州連合などでの行事に定期的に参加しているほか、個別会談の調整や特別行事の主催も担当しています。